The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フィリピンにおける広東系住民は「他者」とどう向き合ってきたか？ーバギオ市とダバオ市の事例を中心にー
Author(s)	Ao, Mengling
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101618
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　AO MENGLING　敖夢玲　）	
論文題名	フィリピンにおける広東系住民は「他者」とどう向き合ってきたか？ ―バギオ市とダバオ市の事例を中心に―

論文内容の要旨

本論文は、フィリピンのバギオ市やダバオ市（以下、「ダバオ」、「バギオ」と表記）に移住した広東系移民と彼らの子孫（以下、「広東系住民」と表記）が、どのように他者を認識し、自分が誰にとって他者であるかをどのように理解しているかを明らかにすることを目的とする。既存の「フィリピン華僑・華人研究」において、福建系住民を中心に構築された「フィリピン華僑・華人像」のなかで広東系住民の特徴が埋没している現状や、多くの場合国家レベルの政策や制度からフィリピン社会のエスニシティーが論じられる課題に対し、本論文では地方文脈の視点から従来不可視化されやすい広東系住民の日常生活やエスニシティー形成の動態的プロセスに焦点を当てる。そのため、広東系住民の故郷からフィリピンへの移動の歴史や、移住先での周囲に対する警戒、他者との葛藤、そして地方文脈の中で彼らが取る行動を詳細に記述・分析する。

まず第１章では、フィリピンにおける広東系住民を対象とする先行研究の整理を中心に、今までの「フィリピン華僑・華人研究」の成果と限界を検討する。そのうえで、本論文では、「地方」の視点を導入し、「他者（Other）」や「コンタクト・ゾーン（Contact Zone）」の概念を用い、広東系住民が地域社会の中で自らをどのように位置付け、認識しているのかを考察する。このようにして、本論文の「フィリピン華僑・華人研究」に対する位置付けを明らかにし、研究の意義を示す。さらに、本研究の分析の枠組みを提示し、調査方法を概説する。

第2章では、広東省からフィリピンへの人口移動の全体像を説明する。

第３章では、広東系住民と「フィリピン人」が出会うローカルな「場」をコンタクト・ゾーンとして捉え、その場における「他者」との出会いを通じて、広東系住民が「鏡像としての自己」（他者によって他者としての自己を認識する）をどのように変容させてきたかを考察する。まず、広東系住民がフィリピンに移住するに至った歴史的背景を概観し、バギオやダバオといった地方都市で、彼らが「フィリピン人」と接触する具体的な状況を明らかにする。その後、呼称や通婚を例に、広東系住民が「他者」との関係で「自己」をどのように位置づけ、確認しているかを分析する。

第4章では、広東系住民と福建系住民が出会うローカルな「場」をコンタクト・ゾーンとして位置づけ、越境によって広東系住民が異なる地域的文脈のなかで福建系住民と接触することで、「鏡像としての自己」をどのように変容させてきたを考察する。福建系住民を中心にフィリピンにおける「チャイニーズ像」が形成され、広東系住民はそのなかで周縁化される傾向がある。こうした広東系住民と福建系住民の異文化接触は、単なるサブ・カルチャー間の交流ではなく、支配と被支配の関係が生じる場となっているのである。この他者化のプロセスにおいて、広東系住民がどのように主体性を持って向き合ってきたかについて、本章で具体的に分析する。

第5章では、広東系住民が帰郷時に「他者」としての自分を意識し、故郷の人々との関わりを通じて「鏡像としての自己」を再認識する過程を考察する。帰郷というコンタクト・ゾーンにおける経験は、広東系住民に自身の「部外者」としての立場と故郷の一部としての立場との間での緊張をもたらし、自己認識に影響を与える契機となる。本章では、この緊張関係が広東系住民の自己認識にどのように影響しているかを探る。

結論では、これまでの議論を整理し、本論文の結論と今後の課題について述べる。本論文を通じて、広東系住民のエスニック・アイデンティティが、単なる文化継承ではなく、地域社会における「他者」との関係性の中で動態的に形成・変容するプロセスであることを明らかにした。特に、バギオとダバオという地方都市の違いが、自己認識の在り方に与える影響を示し、地域文脈がエスニック・アイデンティティの構築に果たす役割を考察した。

一方で、本研究では広東系住民と外部社会の関係に焦点を当てたため、コミュニティ内部の権力構造や文化的緊張についての分析は十分ではなかった。今後の課題として、広東系住民内部の関係性や、中国系新移民との接触が自己認識に与える影響をより詳細に考察する必要がある。また、「歴史」と「記憶」の関係を整理し、個人・家族・集合的記憶がどのように交差し、エスニック・アイデンティティの形成に寄与するのかを明らかにすることが求められる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　AO MENGLING　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	教　授	河森　正人
	副 査	教　授	三好　恵真子
	副 査	教　授	宮原　曉（人文学研究科）
	副 査	講　師	島薗　洋介（グローバルイニシアティブ機構）

論文審査の結果の要旨

AO Mengling氏の博士論文は、主に19世紀後半から20世紀前半にかけて、中国・広東省からフィリピン諸島のバギオ、ダバオ両地域に移住した移民とその子孫（以下、広東系住民と略す）が、どのように「他者」を認識し、「他者」から認識されているかをフィリピンの地方都市の多様性の文脈に即して民族誌的に記述し、これまでともすればエスニック・バウンダリーやディアスポラの概念を用いて説明されがちであった中国系移民の歴史的な状況に依存したエスニック・アイデンティティを、Sinophoneの概念を用いながら再定義しようと試みた研究である。

フィリピン諸島に居住する広東系住民は、これまで福建系住民（中国・福建省からフィリピン諸島に移住した移民とその子孫）とともに中国系住民として一括して論じられることが多かった。こうした傾向は、広東系や閩南系などの言語を異にするエスニックなカテゴリーを独立したカテゴリーと捉えるか、あるいは漢族の下位分類としての民系と捉えるかといった華僑華人研究における長年の論争に関わるとともに、広東系や閩南系を区別せずに「チャイニーズ」として一括して認識するフィリピン諸島の政治的なコンテクストに関わっている。フィリピン諸島の中国系人口の9割を占める閩南系の人口は、マイノリティである広東系と自らを厳格に区別するが、フィリピンの地方政治のコンテクストでは両者、さらにニューカマーは「中国系移民」として一括されてきたのである。

AO氏の博士論文は、研究対象を苦心しながらも精巧な方法で同定し、「広東系住民」を“Sinophone”（華語語系）の概念を用いて捉えようとした点に第１の特徴がある。“Sinophone”とは、華人文学において、規範的中文によって書かれた主流派の文学的テクストに対して、規範的中文に必ずしも親しんできたわけではない書き手が中文で書いた文学的テクストの価値を評価するための概念である。AO氏は、この概念を、マジョリティと対峙するマイノリティとしての広東系住民の位置づけを把握する枠組みとして用い、フィリピン諸島の広東系住民が、フィリピン諸島の主流派に対して、福建系移民を主流派とする中国系移民に対して、中国・広東省に居住する広東人に対して持つマイノリティとしての性格を記述することに成功している。そうすることで、漢族の下位区分としての性格と、固有の民族言語集団としての性格を共存させたフィリピン諸島の広東系住民のあり方が浮き彫りになるのである。

その一方でAO氏は、“Sinophone”の概念で捉えることのできるフィリピン諸島の広東系住民のエスニック・アイデンティティが歴史的な状況に依存している点についても丹念に記述する。AO氏が記述の対象とするバギオには、アメリカ植民地統治期に、ちょうど1848年のカルフォルニアと同じようにゴールドラッシュが発生し、多くの広東系移民が道路建設のために流入した。その後、ブームが終結すると、広東系移民の一部は新たなチャンスを求め、AO氏のもう一つの調査地である、ミンダナオのダバオ・フロンティアに移動した。しかし、今日、ダバオに居住する広東系住民は、20世紀前半にバギオからダバオに移住した人たちではない。バギオからダバオに移動した人たちは、福建系の移民や日系移民との競合を避け、広東系移民が中国系移民のマジョリティを占めるアメリカ西海岸に再移住していった。その代わりにダバオに流入してきたのが、サバなどを経由してミンダナオに流入してきた新たな広東系移民であった。こうしてフィリピン低地民と閩南系移民の圧迫の下、二重の意味でのマイノリティとして、バギオではダバオに移住しない選択をした人たちの子孫がイバロイ、カンカナイ、イスネグといった民族言語集団と接触することで「イゴロット」としてのエスニック・アイデンティティを創造し（あるいは「イゴロット」というエスニック・アイデンティティに新たな要素を加えつつ合流し）、ダバオでは、新規に流入した広東系

住民が再移住の候補地としてのアメリカ西海岸と、帰郷すべき土地としての四邑との間で、エスニック・アイデンティティを模索することとなったのである。

広東系住民をめぐる歴史的なコンテクストにおいて、AO氏が「混血」を意味する民俗概念に着目している点は重要である。ダバオにおいて「混血」は「11点」（11時）、バギオでは「半碌」という語で表現される。これらの民俗概念は、AO氏がフィールドワークにおいて新たに発見した概念である。それぞれ「時針と分針が重ならない」や「半分が欠如している」「どちらの世界にも属しきれない」といった含意を持ち、混血の広東系住民のコンプレックスを反映している。こうした「コンプレックス」がバギオにおける広東系住民の「イゴロット・アイデンティティ」（高地のフィリピン諸島民に対する侮蔑的なニュアンスを持つ用語として、先住民から異議申し立てされ、近年、改めて先住民を統合する呼称としてクローズアップされているのとは異なる文脈でのそれとは異なる）への合流の背景として説明されている点は、フィリピン華僑華人研究のみならず、フィリピン地域研究にAO氏の博士論文がもたらした貢献として評価することができる。

AO氏の博士論文では、「混血」に対する広東系住民の捉え方が、閩南系住民の混血に対する捉え方と大きく異なっていることを指摘している。閩南系住民が「混血」を「出世仔」と呼ぶ理由は、上位世代の通婚を識別する点にあって、「出世仔」が混血ではない閩南系住民（「咱人」）や「出世仔」と結婚することで、「咱人」に吸収されていく。こうした違いは、マレーシアやシンガポールにおいて、閩南系のプラナカン（混血に基盤を持つエスニック・カテゴリー）は存在していても、広東系のプラナカンは稀であると言われることを部分的に説明し得る。またAO氏は論文の導入部分で、セブの閩南系住民が香港で出生したことを理由に「広東人」であることを自認する事例を通して、閩南系住民のエスニック・アイデンティティの構成が部分的にフィリピン低地言語集団に見られる出生地主義の影響を受けていることを示している。フィリピンの広東系住民と閩南系住民は、周囲の非中国系住民によって「チャイニーズ」と認識されるという意味において「中国系住民」であり、エスニック・アイデンティティの構成の非対称性という点では「中国系住民」の下位分類ではない。この矛盾した性質を共存させるところにフィリピンの広東系住民のエスニック・アイデンティティの特徴があることを、エスノグラフィックな記述に基づいて説得的に論じている点は、AO氏の博士論文を高く評価し得る理由の一つである。

本論文を作成するにあたって、AO氏は、2019年から2021年まで、バギオとダバオでフィールドワークを実施する予定であった。しかし、周知の如く、2020年年初から始まった新型コロナウイルス感染症の流行により、フィールドワークの後半部分は実行不能となった。このような状況下ですでに得られたデータに即して研究テーマを修正するという選択肢もあったが、AO氏はそれはせずにフィリピンへの渡航の制限が解除されるのを待ち、短期のフィリピン滞在や、ダバオの広東系住民の帰郷に同行するなどして、不足を補おうとした。研究対象と真摯に向き合うその姿勢は、AO氏の博士論文におけるエスノグラフィックな記述の充実に繋がっている。

以上、AO氏の博士論文は、フィリピン諸島に居住する広東系住民のエスニック・アイデンティティの構成を、移民研究の狭い枠組みに閉じ込めずに、フィリピン地域研究の枠組みにおいて、バギオとダバオの広東系住民を事例に、それぞれの地域社会におけるアクター間の相互作用をエスノグラフィックに丹念に記述することで明らかにしている点に、学術的な意義を持つものである。

以上のように論文審査の結果、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。